

「私たちの負い目をお赦してください」

マタイ6：12

堀田修一 22・7・24

I 「主の祈り」は主が教えられた世界で最も大切な祈り。すべての原則、要素が含まれている。「天にいますわたしたちの父よ（偉大な方への親しい呼びかけ）。前半：神を第1とする祈り＝①御名が聖なるものとされますように（御名が唯一本物の神として聖別され崇められますように）。

②御国（神の支配、神の救い。現在、福音宣教により私たちの心に御国、神の支配、救いが来ますように。将来、主の再臨により全世界に、神の国、支配、救いが完成しますように）。

③みこころが天で行われるように、地でも行われますように。神のみこころが天で完全に行われている。しかし、この地では、悪魔と人間の罪により、正しいみこころではなく、悪が行われている。世界宣教の前進により、人々の心に（神の国、支配、救い）が与えられ、この地、世界中で神の喜ばれるみこころが行われますように。後半：私たちの必要のための祈り。①私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください（私だけではなく、世界中の困っている人に、日ごとの糧を与えてください。すべて与えられているものは、当たり前ではなく神の恵み）。

II 本日の祈りは、主の祈りの後半、私たちの必要の②番目の祈り。「私たちの負い目をお赦してください」：12。主は、私たちがキリスト者として生きる一生の間、罪の赦しを求めて祈るように教えられた。これは、私たちの歩みにとり、決して欠くことのできない重要な祈り。日ごとの糧は、私たちの地上での生活を支えるが、罪の赦しは、私たちに永遠のいのち（神との永遠の交わり）、永遠の生活を保証する恵み。

1. なぜこの祈りが必要か。それは、私たちは主を信じ罪が赦され、聖霊により、日々、聖められ続けるが、この地では、心に罪の性質が残っているので、この世の基準の罪は犯さないとしても、聖なる神の目には良くない思い、心の罪、口の罪を犯さないキリスト者はいない事を主は良くご存じで、「私たちの負い目、罪を赦してください」と日々祈りなさいと教えられた。罪から完全に解放され、もはや罪を犯さなくなるという人はいないことを主はご存じ。神に聖められ続け神に用いられたパウロも誠実に晩年に告白している。「私はその罪人のかしらです。しかし、私はあわれみを受けました」Ⅰテモテ1：15, 16。※証し。神の前に自分の犯した罪を認め、その赦しを求めていくのがキリスト者の本当の姿であることを教えられる。宗教改革者のルターはこう言っている。「私たちの主であり、師であるイエス・キリストが、『悔い改めよ』と言われたとき、主イエスは、信じる者の全生涯が悔い改めであることを願っていたのです」。その通りである。主は、私たちの全生涯が悔い改めであることを願っておられた。私たちの全生涯は、罪の赦しを求め続けていく生涯である。私たちは、本日の主の祈りから再確認したい。主の前に、この祈りをささげ続けてきたか自己吟味をしたい。罪の赦しを求め、涙ながらに祈ったのはいつのことだっただろうか。もし、主の前に自分の罪を認めることを躊躇しているなら、この主の祈りに励まされ、自分の罪に誠実に向き合いたい。「私の罪を赦してください」と素直に祈りたい。

2. 「負い目」の意味。この言葉は、返さなければならない「借金」を意味する。原語で「罪」という言葉ではなく、「負い目（負債、借金）」という言葉が使われている。ここから教えられることは、私たちが犯す「罪」とは、神に対する「負い目、負債、借金」であり、罪を犯すということは、神に対して負債を負うことであるという点。なぜ罪が負い目か。それは、私たちが犯す罪と借金、負い目とが共有する類似性のゆえ。両者は共に、返済を義務づけられている。多くの人々はそのような事実を自覚することなく生きているが、聖書は、私たちが罪を犯すとき、私たちは神に対して負債を負うことになり、同時に返済の義務が生じることを明確にしている。人間世界でも負債は必ず清算しなければならないように、私たちの罪も、神に対して清算するときが来る事を聖書は明確にしている。主の祈りで主は、すべての人は、神に対して罪の返済の借金を負っている存在であると教えておられる。これは、人が認めようと認めないとしても神の前に客観的な事実。その事実を明確に教えているのがマタイ18：23-35。後で読んでいただきたい。ポイントを語ります。この王は、神を象徴している。王に借金のある人は、私たち罪人である人間を示す。人間とは、神に対して罪の弁償の負債がふくれあがっている存在。それが人間についての聖書の基本的な理解。問題はどれくらい罪の弁償の負債があるのかということ。主はこのたとえを用いて、人間は、神に対して一万タラントの罪の負債を負っていることを明らかにされている。この一万タラントがどれくらいの金額かと計算すると、当時一タラントは約16年分の労働賃金と言われている。それ故に、一万タラントは、約「16万年分」の賃金に相当する。つまり、一万タラントの神への罪の借金は、人間がとうてい払いきれない神への返済額、負い目。人間は、神の御前に、生涯かけても自分の力では絶対に償うことのできない罪を犯している。これが神の前の人間の現実。聖書は、私たちがこの厳粛な事実を徹底的に自覚するように語りかける。なぜなら、これを理解しないなら、決して主の十字架の血という代価による償い（罪の負債の完済※証し）、贖いの恵みの福音の中心が心で理解できないから。

3. 清算のとき。借金、負債は必ず返済を要求され、最後には必ず清算するときが来る。マタイ18：24節の「清算が始まると」は、そのような状況を語っている。聖書は、清算の日、審判の日、正しいさばきの日が実際に来ることを明確に語っている。神のさばきについての説教は好まれない。しかし、神が罪を正しく罰することは、聖書の最も根本的な教え。神が悪を正しくさばかず罪を放置されるなら、神は、義、正しい神ではなくなる。世の終わりの主の再臨のとき神の正しい裁きがある。今の不当な悪への裁き。私たちは神に感謝すべき。神は私たちの罪のために御子を十字架に付けることにより、私たちの罪の贖い、償い（16万年働いても返済できない罪の負債の完済）を成し遂げてくださった。その十字架を私のためと信じる者に罪の赦し（負債への完済）を与えてくださる。今や、主を信じる私たちは主の十字架により罪の借金全額の返済を終えている。罪の償いが果たされ、神の前に義とされ、永遠の命を与えられている。私たちは救われ神の圧倒的な憐れみを経験している。しかし、私たちは、完全にされてはいない。

毎日の歩みの中で、依然として自分の罪の現実に直面する。日々、罪を犯し、誘惑に負け、御聖霊を悲しませ、失敗を繰り返してしまふ。醜い心の自分に気づかせられ、がっかりすることもある。そのような現実を真実なキリスト者は知っている。誠実なパウロのことは「私は本当にみじめな人間です」ローマ7：24。だから、罪を犯したと気づいたとき、人を責め責任転嫁せず、この主の祈りを心から献げたい！「私の負い目をお赦してください」と。「私たちの負い目」と祈るとき、ある人が自分の罪を認めず、神から離れ気味なら、その人が神に立ち返るよ

うに願いを込めて「私たちの」負い目をお赦してくださいと祈りたい。主の教会、共同体としての祈り。日々の罪はその日その日に神に告白し赦しを求め清算し、神との交わりの関係を回復したい。罪の告白を延ばしてため込んではいけない。そうすると神との関係が遠くなる。日々次のみことばに従い自分の罪を具体的に神に告白しましょう。「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その（具体的に告白された）罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます（主の十字架の血による赦しときよめ）」Ⅰヨハネ1：9。漠然と「罪を赦してください」と祈るのではなく「私は、このような罪をこう犯しました。心の中に、あなたが喜ばれない悪い動機がありました」と具体的に祈りたい。神は、主の十字架の血で私たちの罪の負債、負い目は完済されている恵みにより、完全に赦してくださいます。告白の祈りの後、祈りましょう。「主の十字架の贖いの故に私の罪が完全に赦されたことを心から感謝します」と。

この祈りの後半は、8月7日の説教で説き明します。

祈り：主の十字架による罪の赦しを感謝します。主の祈りを心から祈り続けさせて下さい。